

## ネブカデネザルの見た正夢

### はじめに

●ダニエル書は終末についてどのように語っているか、そのことを学ぶためにまず取り上げたいのは、ダニエル書 2 章に記されているバビロンの王「ネブカデネザルの見た正夢」についてです。ダニエル書 2 章 45 節には、

「あなたがたがご覧になったとおり、一つの石が人手によらずに山から切り出され、その石が鉄と青銅と粘土と銀と金を打ち砕いたのは、大いなる神が、これから後に起こることを王に知らされたのです。その夢は正夢で、その解き明かしも確かです。」

※「**正夢**」(ヤッツィーヴ・ヘーレム)とは、事実と一致する夢。将来、それが現実となる夢のことです。



●神のご計画のマスタープランを知るためには、旧約の預言書を学ぶことは選択ではなく必修です。

預言書は必然的に歴史を学ぶことになるので、歴史はどうも苦手という人にとっては敬遠されがちです。しかし神のなそうとしておられることを理解するためには、どうしても歴史の学びは不可欠です。といて、いろいろな国の歴史を学ぶのではなく、中東のイスラエルにかかわる歴史を学ぶことが重要です。なぜなら神は、地理的にも、歴史的にも、必ずイスラエルを中心としてご自身のご計画を進められるからです。神のご計画のマスタープラン(全体像)―特に、終わりの日についての理解―が希薄だとすれば、自信をもってキリスト者として生きることはできません。聖書理解(解釈)においても脆弱性をかかえていることとなります。ですから、「終わりの日」についての学びはとても大切です。

●使徒パウロは第三次伝道旅行の終わり、エルサレムへ向かう旅の途中、エペソ教会から長老たちを呼んで、訣別説教をしています(使徒 20:17~38)。その説教の中でパウロは「私は、きょうここで、あなたがたに宣言します。私は、すべての人たちが受けるさばきについて責任がありません。(なぜなら)、私は、神のご計画の全体を、余すところなくあなたがたに知らせておいたからです。」と述べています。ここでパウロが「神のご計画の全体を余すところなく知らせた」ところの聖書は、私たちの言う旧約聖書です(ユダヤ人たちは「タナフ」と言います)。旧約聖書には神のご計画のマスタープランがすでに預言されているからです。しかもパウロが訣別説教をした頃は、すでにコリント人への手紙が執筆された後であり、特にローマ人への手紙はメシアを受け入れなかったイスラエルに対する神のご計画と教会とのかかわりがしっかりと述べられています(9~11章)。

●ダニエル書を理解することなしには、新約のヨハネの黙示録は理解できないはずで、それほどに密接な関係にある預言書なのです。

### 1. ネブカデネザルの見た正夢とは

●ネブカデネザル王は、幾つかの夢を見、そのために心が騒ぎ、眠れませんでした。そこで王は、呪法師、呪

文師、呪術者、カルデア人を呼び寄せて、その夢を解き明かすように命じます。ところが、王の見た夢がなんであるかを告げる者も、またその夢を解き明かす者も一人としていませんでした。そのため、バビロン中の占い師、呪術師、まじない師らは殺されそうになり、ダニエルとその同僚たちも例外ではありませんでした。ダニエルは、王の親衛隊長に王の夢の意味を解き明かすために多少の時間の猶予をいただきたくいと申し出て、それがかないました。そしてダニエルは王にその夢の内容を告げ、その解き明かしをしたのです。



●「ネブカデネザルの見た正夢」は、「終わりの日に起こること」を預言するものでした。巨大な人間の形をした像です。**頭は純金、胸と両腕が銀、腹と股は青銅、すねは鉄、足の一部は鉄、一部は粘土**でした。この像は、見かけは巨大ですが、構造が非常に不安定で、下部に至るほど軽く、そしてろいものでした。この巨大な像に象徴されているのは、頭の純金がバビロン、次いで胸と両腕がそれぞれメディア・ペルシャ、腹と股はギリシャ、すねはローマです。



バビロン

●ちなみに、右にある巨大な人間の形をした像は、人間の視点から見たものであり、神の視点から見ると、実におぞましいグロテスクな獣の姿なのです。このことについてはダニエル書 7 章に詳しく記されています。



メディア・ペルシャ

●いずれにしても、この世の歴史を代表するこれら四つの王国はすべてイスラエルを支配した国々です。しかもすでに歴史の中で滅びた国々です。これらの国はすべてイスラエルと密接なかかわりを持っていたということが非常に重要なポイントです。神の歴史においてはイスラエル抜き歴史はあり得ないのです。



ギリシャ

●この夢を解き明かしたダニエル自身も、バビロンの崩壊とメディア・ペルシャの台頭を目の当たりにしています。しかし**最後の鉄と粘土で出来た足の部分(足の 10 本の指も含めて)は、これから起こる時代のことです。**頭からすねまでの部分までが成就しているのに、最後の部分は実現しないということは到底考えられません。必ず実現するのです。ダニエル自身もネブカデネザルに対して、この夢は「本当に起こる出来事」、つまり「正夢」です、と断言しています(ダニエル 2:45)。



ローマ

●ところで、なぜ頭の部分であるバビロンが純金なのでしょう。それはバビロンの王は「王の王」と呼ばれているような絶対専制君主で、王が法そのものだったからです。王のご機嫌一つで法はいつでも変更が可能でした。それが絶対専制君主国家なのです。人間の国で最強の国、それがバビロンだということは、それ以後の国、メディア・ペルシャ、ギリシャ、ローマと続く中で、その絶対的専制君主は力が弱まっているということ

なります。事実、バビロンを倒した後のメディア・ペルシャでは王がひとたび法令に署名したならば、王といえどもそれを変更したりすることはできませんでした。つまり、専制君主ではなく、立憲国家となっていったからです。そのように考えると、最後の足の部分は、鉄と粘土で出来ていますから、きわめて脆い関係です。つまり連合組織、様々な利害関係によって成り立つ加盟国で成り立っている連合組織ということになります。

●ヨーロッパを統合する欧州連合(EU)が創設された当初(1957年)の加盟国は6か国であったのが、現在は28か国にまで増加しています。きわめて民主的な連合ですが、ダニエル2章43節に「それらは人間の種によって、互いに混じり合いますが、鉄と粘土と交じり合わないように、それらが互いに団結することはありません。」とあるように、人間的な政策による連合はやがて10か国にまとまっていくと考えられます。それを束ねる存在こそ「**反キリスト**」です。この反キリストは、ヨハネの黙示録では海から上ってくる「獣」として表わされます。そしてその獣に権威を与えているのが「竜」の存在であり、この二者を支える「にせ預言者」がいます。これらは悪の三位一体です。

●ところでこの夢で重要なことは、34節の「**あなたが見ておられるうちに、一つの石が人手によらずに切り出され、その像の鉄と粘土の足を打ち(完了形)、これを打ち砕きました(完了形)**」の部分です。

## 2. 足の部分を打ち砕く「人手によらない一つの石」

●ダニエル書2章44節と45節に注目しましょう。

44「この王たちの時代に、天の神は一つの国を起こされます。その国は永遠に滅ぼされることがなく、その国は他の民に渡されず、かえってこれらの国々をことごとく打ち砕いて、絶滅してしまいます。しかし、この国は永遠に立ち続けます。」

45「あなたをご覧になったとおり、一つの石が人手によらずに山から切り出され、その石が鉄と青銅と粘土と銀と金を打ち砕いたのは、大いなる神が、これから後に起こることを王に知らされたのです。その夢は正夢で、その解き明かしも確かです。」

●「**天の神**」という表現は神の超越性を強調する表現です。ダニエル書では4回(2:18, 19, 38, 44)使われています。この表現はバビロン捕囚以降に使われるようになりました(エズラ記7回、ネヘミヤ記4回)。

「**一つの国**」とはメシアによる王国です。その王国は永遠に滅ぼされることがない、永遠に立ちゆく王国です。

「**人手によらずに切り出された一つの石**」とはメシアのことです。メシアによって人間が建国した国はすべて滅ぼされます。「**その夢は正夢**」として、これから後に起こることを神はネブカデネザルに知らされたのだとダニエルは解き明かしています。

●「**人手によらずに切り出された一つの石**」が、鉄と粘土で出来た足を叩き、粉々に砕けます。そしてやがてこの「**石**」は大山となって全地を覆う



のです。ここに登場する「人手によらずに切り出された一つの石」とは、やがて到来するメシアのことです。つまり、ダニエル書 2 章のネブカデネザルの見た夢は「正夢」として、確実に、メシアによって全地は統治される時代が来ることを預言しているのです。頭からすねまでの部分は歴史の中にすでに実現しました。とすれば、残る足の部分も実現するのは火を見るよりも明らかです。そのときが今や確実に近づいているのです。

●ちなみに、ダビデがペリシテ人の巨人ゴリアテと戦ったとき、そのゴリアテを倒したのは「ひとつの石」でした。ここでの「石」はメシア的な意味はありませんが、「一つの石」が巨人を、あるいは「巨大な像」を打ち倒すことはとてもよく似ています。

●「石」はヘブル語で「エヴェン」(אֶבֶן)です。洗礼者ヨハネが人々に悔い改めにふさわしい実を結ぶようにと教えている中に、このようなことばがあります。『われわれの先祖はアブラハムだ。』と心の中で言うような考えではいけない。神は、石ころからでも、アブラハムの子孫を起こすことができになるのです。」と。ここでの「石ころ」と「子孫」はヘブル語で「アバーニーム」(אֲבָנִים)と「バーニーム」(בָּנִים)と、それぞれ複数形ですが、原文では実は語呂合わせになっているのです。「石」はエヴェン(אֶבֶן)、「子」はベン(בֶּן)といずれも単数形です。ここでは「石」と「子」が掛け言葉になっているのです。つまり「一つの石(エヴェン)」は、神の「ひとり子(ベン)」ということです。

●「石」がメシア的表現として使われている聖書の箇所を取り上げてみたいと思います。  
有名なメシア預言の一つ、イザヤ書 28 章 16 節がそれです。

神である主は、こう仰せられる。「見よ。わたしはシオンに一つの石を礎として据える。

**これは、試みを経た石、堅く据えられた礎の、尊いかしら石。これを信じる者は、あわてることがない。**

●「石」(エヴェン)は土台石のことで、旧約時代の建築法では家の重量が全部そこにかかるような要となる石を「堅く据えられた礎の石」(礎石)と言います。イザヤはこの石の特徴を以下のように述べています。

- (1) 「試みを経た石」とは、使用に十分耐え得る試験済みの石という意味。
- (2) 「堅く据えられた石」とは、要となる不動の石という意味。
- (3) 「尊いかしら石」の「尊い」とは「最もすぐれた」という意味。
- (4) 「信じる者はあわてることがない」とは、この石(メシア)に信頼する者は、絶対的な安心を得ることが出来ること、恥をこうむることがないという意味。

●イザヤの時代、王をはじめとして多くの人々は神に信頼することをせず、大国(アッシリア、エジプト、バビロン)に頼り、依存しようとしていました。その結果、イスラエルは北も南も共に亡国の憂き目を経験しました。しかし神である主は、「見よ。わたしはシオンに一つの石を礎として据える。これは、試みを経た石、堅く据えられた礎の、尊いかしら石。これを信じる者は、あわてることがない。」とこう仰せられます。「あわてることがない」とは、失望に終わることがないという意味です。

●イザヤ書 28 章 16 節の「試みを経た石」「尊い礎の石」について、詩篇 118 篇 22 節では次のように語っ

ています。「家を建てる者たちの捨てた石。それが礎の石となった。これは主のなされたことだ。私たちの目には不思議なことである」と。ここには、メシアとして遣わされた一つの石が家を建てる指導者たちによって拒絶され、見捨てられる(十字架の死)にもかかわらず、神はその方を死からよみがえらせて、神の家においてなくてはならない永遠の礎石とされることが完了形で記されています。「(石と)なした」も「なした」もいずれも完了形です。これは「**預言的完了形**」といって必ず実現することを意味しています。

●最後に、新約聖書ではイザヤ書 28 章 16 節のみことばが使徒パウロと使徒ペテロによって以下の通り、自由な形で引用されています。それは LXX(七十人)訳からの引用であるためです。

(1) ローマ 9 章 33 節

それは、こう書かれているとおりです。「見よ。わたしは、シオンに、つまずきの石、妨げの岩を置く。彼に信頼する者は、失望させられることがない。」

(2) ローマ 10 章 11 節

聖書はこう言っています。「彼に信頼する者は、失望させられることがない。」

(3) I ペテロ 2 章 6 節

なぜなら、聖書にこうあるからです。「見よ。わたしはシオンに、選ばれた石、尊い礎石を置く。彼に信頼する者は、決して失望させられることがない。」

●神によって選ばれた一つの石は、ある者にとっては「つまずきの石」「妨げの岩」となります。しかしこの石に信頼する者は、決して失望することがないのです。ときには失望することがあるかもしれませんが。しかしある訳では、「失望に終わることがない」(口語訳)のです。ですから、この「石」であるイエス・キリストのもとへ行き、この方にしっかりととどまることによって、ぶれることのない信仰の歩みをする者になりたいものです。